



館報発刊にあたって

館 長 白 井 光 男

当博物館は、去る昭和40年4月に発足してわずか3ヶ年を経過したにすぎませんので、何かと不備な点が多いかと存じます。また、神社の経営によるものですので、独立した一般の博物館とは多少その趣を異にしているかと思われます。すなわち、博物館活動はただちに神社の教育活動ともなるからです。

久能山東照宮には、従来50年前に建てられた宝物館があって、博物館が建設されるまでは、ここで宝物を一般に公開して居りました。これは、単に拝観させるということが主で、時々他所の展覧会に出品していたにすぎなかった状態です。しかしこの項では、広く文化財知識の普及向上に一役果さなければならぬ時世となりました。それは、一般的な文化財に対する知識の向上にもよりますが、単に公開しているだけでは責任が果されていない様な時代になったともいえます。

多くの博物館におかれては、豊富な財源と、資料と、そして永年の経験とによって、巾広い活動を展開され、特に広報活動においては、優秀な出版物を出されております。当館では、出発以来日も浅いので、春秋の特別展や文化財入門講座を開設して、いささかなりとも文化財に対する認識と、その愛護とに努めては来ましたが、まだ広報活動には何等の手もつけておりませんでした。そこで、この方面にも努力したいと考え、今回館報を発刊することにいたしました。まことにささやかなものではありますが、これによって、当館の状況を御覧願ひ、また、論考によって、この道の向上の一助ともなれば幸せと存じます。

静岡県内における博物館的施設の 現況と将来への希望

静岡県文化財保存協会事務局長

浅 倉 清

近年、殊に明治百年記念の一事業として各地で博物館や美術館をきそって建設しようとする動きがみえてきたことは、まことに喜ぶべきことである。ことに、一府県一つの親図書館、博物館に相当する施設があつて、その地域の文化の中心的役割を果す必要があると思う。

本県でも、こうした動きが、最近の国鉄新幹線及び東名高速道路の建設工事に伴ない、埋蔵文化財の著しい出土と共に識者の間に、これらの出土品の散逸を防がねばとの意見がもりあがつて一層拍車をかけ、ようやくその構想も熟し、着手の段階にまで至った。

すでに、県の文化センターの一環として静岡、清水の中間草薙に、スポーツ センターとして建設されている運動施設の隣地の有度山の中腹に、二八万三千平方メートルの洪大な、静かな環境の中に、七個の噴水群をとりまく芝ふの大庭園を中心に、資料図書館の建設から開始されはじめた（二月二十三日起工式）。つづいて博物館（兼美術館）、音楽堂（兼演舞場）も着手され、その名にふさわしい施設が出来ていくことは健康で明かるい暮らしを実現するための県民にとって、まことによろこばしく希望にみちている。

次に県内にある公設及び私設のこうした施設についてご紹介かたがた、その現況の大略を述べてみたいと思う。

まず公設のものには東部の方から韮山町の郷土史料館、静岡市登呂の静岡考古館、磐田市の郷土館及国分寺跡収蔵庫、浜松市颯塚の郷土博物館及び浜松城博物館、新居町の関所跡展示室などがあつて、それぞれその館特有の記念物が展示され来訪者の観覧に供されている。この内浜松城のそれは年間種々の特殊な展示会を開催して市民の啓発に尽していることはまことによろこばしい。こうした地域にはよき指導者が存在し、又一般大衆も文化財に対する認識も強いのか前述の各地には文化財少年団が誕生し、それぞれ年間を通じて活発に動いている。

次に私設のものには独特のものが他県に比べて比較的多い方ではないかと思われる。東部の方から述べると、下田町の黒船記念館は名の通りペリー、ハリス関係のもので開港当時の下田の様子が生きたのばれ、玉泉寺には最初のアメリカ領事館関係の資料がみられ、熱海美術館は箱根美術館と共に世界救世教々祖故岡田茂吉氏の収集したもので熱海の方は特に国宝紅白梅屏風をはじめ多くの国宝、重文の絵画、彫刻、浮世絵、茶器等の名品を蔵し、時々陳列換えをして来訪者を楽しませてくれる。次に修善寺町の修禅寺及び三島市の三島大社、妙法華寺にはそれぞれ宝物館があつて関係宝物を陳列している。又最近三島に立派に建設された佐野美術館は同地出身の佐野隆一氏の多年収集された古美術品、特に絵画、彫刻、工芸品の各分野にわたり、中でも日本刀は名品揃いである。

静岡にきて久能山東照宮博物館は家康をはじめ歴代将軍の国宝の武具並びに日用品、遺墨など江戸時代の逸品を豊富に所蔵し年間を通じ独自の展示会を開いている。殊にここの博物館は友の会をつくり、毎年夏季会員並びに附近の中、高校生に呼びかけ特別講座を設けて講義は勿論、豊富な資料を駆使して地域の子弟の文化財に対する啓蒙に努力せられていることは大いに称揚すべきである。

西部に至っては浜松市の明善記念館及び三日町の大福寺、共に立派な収蔵庫を兼ねた展示室をつくって一般の観覧に供していることはその内容のよさと共にまことに有難いことである。

以上のような現況で、これをその活動上から大別すると、収蔵庫兼展示室で、年間殆んど内容の変化のない、その館特有のものがあって観覧者が常に異なる、いわゆる宝物館的型のものと、年間目的を以て特殊な品々を陳列替えを実施し、特殊な観覧者は勿論、一般大衆を対象にする、いわゆる取替展示型とがある。前者を甲、後者を乙とするとそれぞれ特色を持っている。即ち甲の場合はその施設そのものがそれだけで独特の価値のあるもので、目的は十分果していると考えられる。すなわち、有名観光地で年中一般大衆の往来する地には適するがその地域在住の人々にはあまり関心のない存在になる。これに反し乙の場合は陳列替を行う度に観覧者は押しかけ、その地域の人々との親しさも増し、意見の交流も行われ向上が期待され、特殊なものだけに場合によっては、全国的に多くの観覧者を招くことが出来る、例えば最近の東京博物館の海外の有名美術品の特別展、或は鎌倉美術館の円空展とか木喰展の如き、いずれにも得失があることは申すまでもないが、そこで一つの提案を試みたい。

一、資料の活用と交流

甲の場合、年中あまり変化のないことは、その附近の者にとっては、まことにもの足りないし、親しみも薄くなるので、その施設の本質を失なわないで、その地域とのつながりを深くすることを考慮すべきであると考え。それには、そこにある立派な貴重な宝物を中心に、その横のつながり、或は縦のつながり即ち後世への影響とか、それにまつわる関連的研究及び資料の収集などをし、特別展などを年に一度位は実施したいものである。それには郷土史家とか他館との資料の交流、情報の交換、共同研究、相互援助など協力して絶えず、一般大衆を呼びよせる工夫が大切で、このことがその施設を生かすことにもなり、遺徳の顕彰にもつながり、経済面にも寄与すること間違いなし。

二、地域との親和と資料の発掘、

地域との親密度がなければ何事も出来るものではない。従ってまず郷土史家との情報の交流が第一着手で、互に親しさが増せば資料の交換もでき、新資料の入手も出来る機会が多くなり、一般大衆にも影響し文化財に対する理解も増し、遺跡保存の必要とか、古文書などの散逸などにも積極的に協力するようになる。

以上希望事項としてまだ述べたいこともあるが与えられた紙数の関係で後日にゆずることにする。

友の会だより

久能山東照宮博物館には、文化財に関する知識の向上を高め、会員同志の親睦をはかるために「友の会」が組織されております。

昭和42年度は、文化財の入門講座を中心に、春・秋の特別展にともなう「集い」を催しました。映画会や講演会はかなり人気があった様です。来年度は、さらに見学会を行い、会員の親睦をはかりたいと思います。東京や名古屋にも会員がおりますので、そちらにも出掛けて、博物館や美術館を見学する計画もたっています。

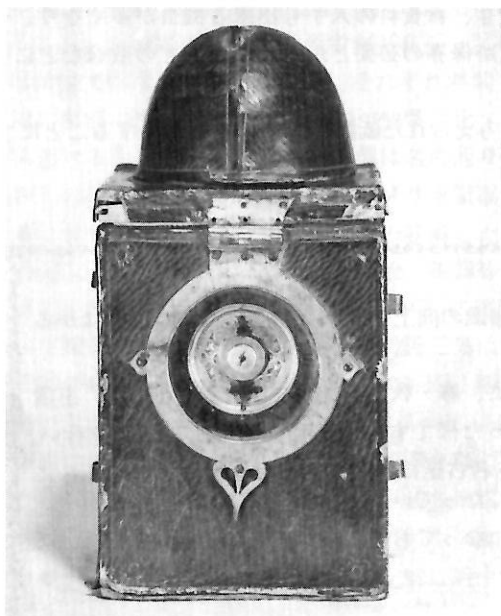
また、毎月のオ一日曜日が「友の会の日」になっており、会員や館員との座談の場となっておりますので、進んでお出掛け下さい。

枕 時 計

学芸員 森 威 史

当館に保存展示されている家康使用のスペイン製枕時計は、13年前の『時の記念日』に、そのチャイム音を全国放送したことと、その後、心ない人のために盗難にあったこととで、世の多くの人の知るところとなった。当時、国立科学博物館におられた朝比奈真一博士らは、この時計の分解掃除を行なうとともに、製作者であるハンス・デ・エバロについても調査することにした。ところが、エバロの作ったもう一つの時計がスペインのエスコリアル宮殿にあったことと、エバロがフィリップ二世と三世に仕えた王室時計師であったことが判明しただけで、それ以上のことは、何ひとつ明らかにされずに終わってしまった。それから10余年、スペインの熱心な学者のたゆめぬ努力により、少しずつエバロに関する資料が発見され、調査されてきた。そこで、それらの新事実に触れながら、あらためて、家康使用の時計を紹介してみよう。

今から359年前の慶長14年9月3日、スペインの植民地であったフィリピン諸島の長官ドン・ロドリゴ・デ・ビベロ・イ・ベラスコは任期を終えて、フィリピンのカビテ港から帆船サン・フランシスコ号（1000トン）で、メキシコを経てスペインに帰国する途中、暴風雨におそわれ、進路を誤り、房総半島の轟台の東南東1キロに当る、岩和田の田尻海岸の沖合で暗礁に乗上げて難破してしまった。サン・フランシスコ号は当時としては最大級のガレオン型帆船で、乗組員の内50人は難破の際水死し、残りの370人は500メートルたらずの田尻海岸に上陸した。一行は、この地を支配していた大多喜城主本多忠朝に迎えられ、江戸に出て徳川二代將軍秀忠に会った。次いで駿府で家康に会い、その家臣本多上野介を通じて、日本とメキシコの通商と、メキシコの産銀技術を輸入するよう折衝を受けた。そして三浦按針（ウィリアム・アダムス）が、伊東の松川河口で建造した120トンの帆船を家康からもらい、それにサン・ペナベンツラ号



(幸運という意味)と命名し、1610年8月1日に浦賀をたち、同年10月無事メキシコのアカプルコ港に着いた。以上のことは、ドン・ロドリゴがスペイン国王のフィリップ三世に出した報告書『ドン・ロドリゴ日本見聞録』に詳しく記してある。

さて、この家康の好意に感謝して、ニュースペイン(メキシコ)の総督ドン・ルイス・デ・ベラスコは、セバスチャン・ビスカイノを答礼使節として、1611年3月に日本へ向わせた。この船は同年の6月初めに浦賀に着き、ビスカイノは江戸で秀忠に、駿府で家康に会い、総督の感謝状とたくさんの贈り物をした。その中に、この時計があった。それは、家康の顧問であった崇伝長老(本光国師)が書いた『異国日記』にしるされている。この時計については、すでに朝比奈貞一博士が雑誌『時計』(才1巻才9号、1949年9月)に「久能山御時計拝見記」として発表されているので、その記事をここに紹介しておく。

「この時計は、いわゆる枕時計(Travelling clock)であって、黒革のケースに収め、吊り革を持って下げて歩けるようになっていたのであるが、吊り革は、失われその取り付け用金具だけが残っている。文字板は正面の丸窓のがガラスを透してケースの外から見えるようになっている。ケースの頭部が蓋になっていて、それをあけて時計を出し入れするのであるが、蓋の蝶番の金具は傷んでいて、蓋と身とは離れ離れになっている。時計の全体の高さは20センチで、外側は真鍮毛彫模様、鉄機械で、真鍮製香箱に収められたゼンマイを動力とし、文字板にはローマ数字でIからXIIまで時刻が記してあり、その間に1時間を4等分する刻みがある。このことから、当時のヨーロッパの時計の精度も大体見当がつく。正面文字板の下に楕円形の金属板がリベット止めてあって、それにラテン語の文字が記してある。その左に鍵孔があって、その内部にある香箱のゼンマイを捲くようになっている。これによって目覚用の槌を動かす。箱の頭部の四隅にあるネジを外すと、装飾の透かし彫が外れ、次いで鐘を外すことができる。透かし彫を除けば大体一挺テンプの和時計に似た構造であって、和時計がこれらをもとにして製作されたことがよく判る。正面に向って左側面の扉には鍵孔があり、それによって運針動力のゼンマイを捲くことができる。この扉は背板との間が蝶番止めになっていて、それを開くと運針用の香箱が見える。香箱の歯車にカナがかみ合っていて、それが直ちに冠形の歯車を動かし、これに爪が引っかかって目覚用の槌を振らせる。この仕掛けも和時計の目覚用によく用いられている。運針用の香箱と最初の歯車との間は鎖引になっている。鎖としてはガットのようなものを用いたらしい。そして、それは失われて現在はなく、粗末な荷造用の紐がわたしてある。時計に向って右側面の扉にも鍵孔があり、それで時打用のゼンマイを捲く。扉を開けると左下にその香箱が見える。これは、もちろん鎖引でないから鍵は香箱の軸にじかにはまるようになっている。頭部の鐘の内側にはすでに記したように時打用の槌と目覚用の槌とがあり、槌の鐘に当る方は尖っている。それ故、時打用の槌はハンダごてのようになって居り、目覚用の槌は両端が尖っている。鐘の真下には細い棒テンプがあるが、和時計のように糸で吊ってではなく上下をピボットで支えてある。また棒テンプの両端にはJ型の小さな水平の鐘がとりつけてある。さて、前にのべた楕円形の金属板に彫りつけた文字であるが、スペイン語まじりのラテン語で「ハンス・デ・エバロが1581年にマドリッドで私を作った」と刻んであった。以上が雑誌『時計』に紹介されたものである。

ところで、このハンス・デ・エバロについては、当のスペインにおいても、エスコリアル宮殿に彼の作った時計があるということが知られていたのみで、そのほかのことについてはなにひとつ知られていなかった。しかし、この空白は、現在ではルイス・モンタニェス氏、アントニオ・ロドリゲス・モニノ氏、パウリナ・フランケーラ女史らによって埋められつつある。

モニノ氏は、バダホスにあるフランス外務省儀礼局の記録保存所に保管されていた文書をさがし当てた。それは、エバロが自分に支払われるべき200ダガットを得るために証した1580

年11月19日付の委任状で、ハンス自身のサインがしてあった。

一方、フランケーラ女史は、ハンスが国王付きの時計師でなかった時代の新しい記録文書を発見した。それは請願書で、その中でハンスは、いまでもらっていた賃金を王に元どおり払ってくれるように頼んでいる。その請願書の裏には、王がハンスにいままでどうり賃金を払うと裁可しており、1597年4月20日の日付けをうっている。

さらに、モンタニエス氏は別の二つの文書類を発見した。一つはフィリップⅡ世の書記官ラミロ・デ・サベルサが交付した証明書で、ハンスが1580年1月18日に王所属の時計師に指定されたことと、その仕事を1598年10月末（これは彼が死んだ日であるが）までやったことを確認できるものである。他の一つは、ハンスの息子のロレンソ・デ・エバロが1621年6月にフィリップⅦ世に当てて、彼の父が王に仕えていた時の職の一つを希望した覚え書きである。この覚え書きによって、ハンスが1558年にはじめて王室の時計師となり、ついで1580年に王室所属の時計師となったことがわかる。

また、フランケーラ女史はハンスがイサベリエ・コーレスと結婚しており、彼女はハンスが死んでから、ハンスの弟子であり、王に仕える後継者でもあったブラッセル生れのヘニン・コカールトと再婚したこと、ヘニン・コカールトがハンスの息子のロレンソに、時計作りの技術を教えたという事実をも立証した。

以上の貴重な事実の発見は、いままで知られていなかった16世紀の天才的な時計師を知る重要な手がかりとなった。しかし、ハンス・デ・エバロについては、まだまだ多くのなぞに包まれている。同様に、エバロ作の時計がスペインから日本の家康のもとにきた経路についても究明されていない点がある。

387年前に技術の粋を集めて作られたこの時計を、ただ古いものとして見るだけでなく、東西文化交流の貴重な資料として、取扱わなければならない。

博物館のあゆみ

- ◇40・4・1 博物館開館。平常展「徳川家康公遺品及び歴代将軍武具展」を開催。
- ◇5・1～5・16 浜松市立郷土博物館主催の「浜松城関係資料展」に資料を出陳。
- ◇6・28～7・1 日本博物館協会主催の才三回学芸員研修会へ森学芸員参加。
- ◇9・11～10・18 徳川美術館主催の「三百五十年忌徳川家康展」に資料を出陳。
- ◇10・1～10・31 別館にて秋の特別展「武家の服飾」を開催。
- ◇10・17 特別展記念講演会を本館ホールで行なう。講師は国学院大学教授樋口清之博士。演題は「服飾の歴史」。
- ◇10・12～10・26 東京銀座松坂屋にて行われた読売新聞社主催の「太閤記展」に資料を出陳。
- ◇10・13～10・18 静岡田中屋にて行われた静岡県文化財保存協会主催の「才三回目で見る郷土の歴史展」に資料を出陳。
- ◇10・16～10・20 新潟市大和百貨店で行われた静岡県及び静岡県観光協会主催の「静岡県の観光展」に資料を出陳。
- ◇11・11～11・20 福島市中合デパートにて「徳川家康展」を開催。
- ◇11・13 静岡市法伝寺で行われた日本美術刀剣保存協会静岡支部主催の研究会に森学芸員参加。講師は本間順治氏。
- ◇11・16～11・29 静岡女子短期大学主催の「伊勢物語関係文献展」に資料を出陳。

- ◇11・24～11・27 才13回全国博物館大会に森学芸員出席。会場は東京国立博物館。
- ◇11・25～12・5 山形市大沼デパートにて「徳川家康展」を開催。
- ◇41・1・5～1・10 大阪高島屋で行われた日本国有鉄道主催の「観光展」に資料を出陳。
- ◇1・7～1・18 岡山市天満屋にて行われた山陽新聞社主催の「戦国三傑展」に資料を出陳。
- ◇1・21～1・25 福山市天満屋にて行われた山陽新聞社主催の「戦国三傑展」に資料を出陳。
- ◇3・20～5・5 別館にて春の特別展「久能山歴史展」を開催。
- ◇4・7～4・19 姫路市山陽百貨店で行われた兵庫県教育委員会・神戸新聞社主催の「信長・秀吉・家康展」に資料を出陳。
- ◇4・15 重要文化財に新指定された当館所蔵の具足三領（いずれも徳川家康公着用のもの）が東京国立博物館にて展覧されたため、森学芸員視察。
- ◇5・26～5・27 神奈川県箱根町にて開催された東海ブロック博物館連絡協議会に森学芸員と小沢書記が出席。
- ◇6・15～6・28 文部省主催の才一回博物館職員研修会に森学芸員参加。
- ◇7・15 アメリカ時計学会々員 Wheeler 氏夫妻、日東タイヤ磯崎専務の案内で来館、エバロ作の枕時計を特別鑑賞する。
- ◇8・1 博物館友の会を発足する。
- ◇8・4 静岡県教育委員会・静岡県文化財保存協会との共催で才一回文化財入門講座を開講する。会場は本館ホール。講師は静岡県文化財専門委員の加藤忠雄氏と当館学芸員の森威史氏。講座は加藤氏が「駿府と家康公について」、森学芸員が「刀剣と甲冑について」。文化財映画「法隆寺」も上映。
- ◇8・22～9・3 東京大学で行われた才11回太平洋学術会議の人類学部門と博物館部門に森学芸員参加が認められ出席。
- ◇9・7 ハワイ大学人類学研究所のPearson 助教授来館。日本文化研究について森学芸員と会談。
- ◇9・13～9・18 静岡県文化財保存協会主催の「郷土の明治百年展」に資料を出陳。会場は静岡松阪屋。
- ◇9・28～11・9 別館にて「徳川家康公及び歴代將軍遺品展」を開催。
- ◇10・1～11・6 秋の特別展「漆と生活」を本館にて開催。
- ◇10・2 サントリー美術館友の会員55名来館。
- ◇10・16 秋の特別展記念講演会を本館ホールにて行う。講師は東京国立博物館学芸部長岡田譲氏。演題は「漆の話」。
- ◇42・3・21～5・31 明治維新百年記念として春の特別展「徳川慶喜公展」を別館にて開催。
- ◇6・27～6・30 名古屋市にて開かれた才15回日本博物館大会に森学芸員参加。
- ◇8・6 静岡県文化財保存協会との共催で、才二回文化財入門講座を本館ホールにて行う。講座は「静岡県下の城と城の見方」で、講師は日本人文地理学会々員安本博氏。他に文化財映画「日本の城」を上映。
- ◇10・1～11・5 山口県立山口博物館主催の「近代国家への歩み展」へ資料を出陳。
- ◇10・1～11・5 秋の特別展「徳川家の武具」を本館にて開催。
- ◇11・10～11・16 才16回印刷文化典実行委員会主催の「伸びゆく郷土と印刷展」に資料を出陳。会場は静岡松阪屋。
- ◇11・21～11・22 東京国立博物館で行われた、文部省主催の文化財指導者講習会に森学芸員出席。
- ◇11・27 東京国立科学博物館にて行われた全国登録博物館々長会議に白井館長出席。
- ◇43・2・24～3・24 茨城県立県民文化センター主催の「信長 秀吉 家康展」に資料を出陳。

文化財を見る目

友の会会員 山 口 光 司

最近困った事といって、これ程戸惑った事はない。館報に一筆などと請はれても、博物館について云々する種もなく、何を書いてよいのやら、不少困惑した。しかし、お世話になっている博物館ではあるので、日頃感じているままに筆を運ぶ事にする。

まことにありがたいと思っているのは、国宝、重要文化財など、立派な文化財の数々を、何時でも気軽に鑑賞出来るということで、友の会会員であることに、一種の優越感の様なものを感じ、もっぱら鳥居を潜るのは自分だけだろうか。

まず九折れの石段が良い。穏かな海を眼下に愛でつつ一段一段昇るのが面白く、長坂から見下す石段のリズムは心地良い。柵の様なビルや、扁平な舗装道路ばかり見ている目には、何んと心の落着く眺めだろうか。博物館は、これを登りつめた所にあるから、また良いのである。風光豊かにして由諸ある史跡、久能山にあるからこそ、ありがたいもあるといふものだ。自分の部屋に、鎧兜を置いても、さしてありがたい味もわいてこぬだろう。世間には文化財や骨董の類を買入れ蒐集欲を満たしているご仁もいるとか。それにひきかえ、先祖伝来の家宝を少しでも役立てようと、博物館へ寄贈する篤志家や、消滅を慮って私財を投じ、私立博物館を設けるにいたっては、ただただ頭の下るばかりである。こんな事を考えながら博物館を訪れ、自分の大切な持物の如く一人満足げに眺めてはいる。何を観るかといえば、専門的なことはさておいて、武具、特に刀剣類に興味を覚え、素人目にも心をひく名刀の数々を眺め入っているのである。

学術的管理保存は博物館を関する専門家にお任せするとして、これら数々の文化財に関心のある者が、その土地、あるいはその国に生まれ生活している人々に、教え伝える事により、その人の生活を知り、心を識り、そこから潤いや、感謝や、勇気や、希望を湧いて来させるのではないだろうか。修学旅行等における学生達の文化財に対する悪戯は、不心得千万と立腹は尤もな嘶いはあるが、一方、この哀れな不心得者達に前記の様な周りからの働きかけが不足しているといつては、考え過ぎだろうか？

昨年の夏、東北を車で一巡りして来た時のこと、気ままな一人旅であったのが幸いして、その地方の生活に触れる機会を得ると共に、その土地土地の歴史に継がる文化財に、興味深く接する事が出来たのであるが、人々が祭事や生活の中に、郷土の文化財を受け継ぎ、護り育てようという、暖かな心情が流れているということは、嬉しい発見であった。そこを訪れる者に、郷土のよさを、文化財のすばらしさや先輩の偉大なことを、熱心に納得させようとする。我々もこんな態度の中に見習うべき点があることを感じ、同時にその良さを人に知ってもらうためには、先づ自分でそのものが解っていないかならなければならないと考えた。

去年久能山東照宮博物館で開催された講演会は、内容的にも興味ある企画であると心待ちにしていたのであるが、この折角の催しに万障繰り合わせることが出来ず、はなはだ心残りであったのを思い出す。今後は、テーマも会員諸氏から募るなどして、屢話の聞ける機会を設けてほしいものである。

あれこれまとまりのないことを書いてしまったが、これからも時々博物館を訪れ、目を楽しませていただくと共に、これとおぼしき友人や、外来者にその良さをPRしてゆきたいと思っている。

編 集 後 記

年度末の発刊で、皆様におとどけするのが遅れてしまいました。創刊号ですので色々とお気付きの点がおありの事と思います。ご意見をお寄せ下さい。(森記)

久能山東照宮博物館報

— 創 刊 号 —

昭和43年3月25日印刷

昭和43年3月31日発行

編集 久能山東照宮博物館

発行

静岡市根古屋350 TEL.85-5612